

語り手

砂川 すながわ

隆 たかし
さん



塗師、砂川漆工芸 代表
姫路市西新町

一九七三年二月、姫路市西新町で三代目・弘征の二男として誕生。一九九五年に、砂川仏壇店（砂川漆工芸）で修行を開始しました。扱うのは獅子頭や祭り屋台、本格仏壇。漆の魅力を最大限に引き出すためには「漆の邪魔をしてはいけない」と常に考え、活動しています。二〇一六年、兵庫県技能顕功賞を受賞。

美意識は、微差の積み重ね。

砂川漆工芸のはじまり

砂川の歴史は、元禄時代から。姫路の飾磨で塗師（ぬし）として創業し、一九〇七（明治四十）年に暖簾分けして、初代の重蔵が西新町に「砂川仏壇店」を構えました。姫路は城下町だったので、武家社会ということで武士関係の：刀のさやとか籠なんかを塗っていたと聞いてます。戦乱の時代が終わると、その延長で仏壇を塗り始めた。現在は下地から上塗りまですべて天然漆を使う漆塗りと金箔押し、彩色が本業です。

姫路は、産業的にも豊かな土地だったんじゃないかと思えます。南には瀬戸内があって、東西を結ぶ道があって、但馬や丹波へ行くのは播磨から。食べ物も豊かやったやろうし、風土や産業が豊かやから、祭りが大きくなっていったのもそのへんが理由やと思います。地方の祭りはさまざまありますが、この播州ほど、祭り屋台の豪華さを兼ね備えてて盛大にやっているとところはなかなかないかな。たとえば祇園祭りなんかは、そんなにやりかえるものじゃない。激しくないし。播州は、下手したら十五年くらいで新調するんです。自分らのお金でね。屋台って、心意気とか豊かさの象徴や思うんです。

四代目を継ぐということ

継いだのは、二〇一七年。二代目、僕から言うとおじいさんが親父にゆずったのが、その時の僕の歳やったんです。息子がその歳になったらタイミングかなあと思ってくれてたみたい。年の離れ方も似とんです、おじいさん、おとんと僕と。後を継ぐように言われたの

は、継ぐ一カ月ほど前。二〇一六年の十一月終わりか十二月頭くらいに「来年からお前せえ」って。思ってたより、一年早かった。いつでも受けて立つて、とは思ってました。

学生時代は、祭りには興味がなくて。興味わかんまま、仕事の一年目を迎えて。今思えば、変わった職業でだれでもがしてる仕事じゃない、手を動かす、ものをつくっていくところ的魅力を感じたんかなあ。好きだけではできへん、客観的に見てる部分がないと。道楽じゃないんで、金額的にも成り立たさないとあかんでしょ。好きやと、そのへんが厳しくなってくる。全体が見える目え持っていないと、やり続けるって好きだけじゃないと思うんすよ。もちろん嫌いじゃないけど。僕らが浮かれとったらいかん、あくまで裏方なんで。

ある方に言われて、なるほどなあと思ったんは：「先代が一生かけて学んだことをまるまるもろて、お前なんやぞ」「親父が学んで培ってきたものを全部バトンタッチしてもうとんやぞ、そっから先に行つて当然やぞ」ってこと。七十いくつまででできたことを、三十や四十で教えてもうとうから心強い。親父の教え方は、見て慣れろつてやつ。手の加減、指の加減、やっていくなかで気づいていくしかない。楽器なんかでも、全部教えてもうたからって弾けへんもんね。

失敗がなかったら、今はない

二〇一〇年から、制作は自分でしよんですけど…三十七歳かな、十五年目でした。祭り屋台の屋根以外は十年でもできるけど、祭り屋台の屋根だけは特殊で。平らなやつを「ひらもん」言うんですけど、ひらもんが普通に熟達してできるようになった、少し先やったと思います。最初からはできへんです、やっぱり。失敗もしてます。気合い入れなおせ



よって神様がはからったかのように、落とし穴がありました。けど、失敗がなかったらできてない。このままではあかんと思って、より高みをめざすうち、肩の力が抜けて、流れに任せていいんやと思えるようになった。ざっくり言うと、なるようになっていく。たどり着いたところが行き先なんやろね。

漆の邪魔をせず、機嫌を聞く

漆の粘り気は独特で、サラサラとネバネバがあるんです。温度と関係あって、冬場に堅い漆で塗っていると伸びひん。気温低い時は、サラサラの漆を使う。サラサラを夏つこたら、サラサラすぎて肉が薄なるんやね。塗り厚が薄くなって、垂れることも誘発する。だから夏場は、堅めの漆。もひとつ大事なのが、乾く速さ。普通のやつ、次の日には乾いてるやつ、速い漆と遅い漆、色々あって、漆を採取する時期によるらしいんです。あまりにも速い漆やと、梅雨時期は湿度高すぎて表面が縮んでしまう。そういう時は、速く乾かへん漆を使うんです。

ほっといてもきれいんです、漆って。ひととおり失敗して、たどり着いたのは「漆の邪魔したらあかん」いうこと。漆っていう天然素材は、一番乾きやすい環境がある。それをこっちが整えただけ。乾かし方知らなかったらべチャベチャやったり、乾きすぎて表面が縮んだり。普通に乾かしてあげられたらきれいもんやのに、塗師の「俺が俺が」みたいなところは抑えなあかん。下地にしても、シルエツトは確かにつくるんですけど、一回一回の下地をちゃんと乾かさないと成り立たへん。漆の機嫌を聞くんやね。

祭り屋台は、二十五層

下地って一層だけやなく、重ねるんす。重ねて、面を整えて、次に塗りにいって、それを研いだ面が最終のシルエット。表面の肌を整える、プラス形を整えとんやね。祭り屋台の場合には顕著で、骨と肉の融合関係。祭り屋台の白木の屋根が骨やと考えてもったら、下地が肉なんすよね。骨のまま塗っても、骨が黒なっただけ。下地という肉を盛ることによって見てほしいラインにする。つまり塗りは皮膚。最後の皮膚しか見えへんだけで、その肉が形をつくっとんす。だから、特に祭り屋台は下地が八割以上かなあ。二十五層重ねる中で、二十層下地やからね。大工さんは曲線を木で表現するんですけど、どうしても木のゴツゴツ感とか誤差が出る。漆塗りして仕上がったら、ぷくっとしとんす。ぷくっとさすんは難しい。それを、きれく、ぷくっとささなあかんのです。均一さと、もとの白木のくせを見極めなあかん。ただ黒くするだけの仕事やったら、感動する祭り屋台にはならないんすよね。

美意識は、微差の積み重ね

古い仏壇をよく預かるんですけど、見た瞬間にうちの仕事かどうか分かる。よその仏壇は、絶対わかる。古い屋台も細部のつくりこみを見たら、わかるんすよ。「これ、昔うちでしたやつやろ」って親父に言うたら「そやな」って言うわけ。心地いいフィニッシュにしとんすよ。いいと思うものって、多少の振幅がありながらも幹は変わってへんのやね。それを磨くには、きれいなものを見るういうことちゃうんすかね。ものを見る目が変わるから。気づくというのは、見てきたことや結果の微差の積み重ね。きれいってというのは定義できないけど、自分がきれいって思うものでいいんです。その表現に、お客さんがつきますから。

ほんま、微差が大事です。微差が積み重なって、もうすごい差になってもうとんす。



作業してて、これどうしようかなっていうことがある。二手の選択肢があって、今までどおりでしょうか、でも気づいてもうたしとこかかってのが。ここで、今までどおりのやり方を選択したら、他の場面でも簡単な方を選んでしまう。その選択がどっちでもよかったとしても、気づいたしやとこかの方の気持ちに微差を生んどう思うんすよ。何個か枝分かれがあって、全部、気づいたしやとこかの方を選んでいたら、コストになっとう場合もあるんすけど、大事なことはそういうこと。時間かかるけどね。

新しい厨子が生まれるまで

「仏壇いらんから、処分しに来てくれ」というのが年に何本もあります。お寺さんに性根抜いてもって、僕らが引き取りに行って、分解して処分する。そのまま捨てられへんです。守りするのも大変で、大きい仏壇置いてた家が空き家になっていたり、が多いです。新居に大きい仏壇持っていこうにも仏間がない、仏間があっても大きいのは入らへん言うて。借りる方も借りれへんわね、そんなん置いてあつたら。

ちっさい仏壇の、安ういやつは今までもあって、もちろんそれも手え合わす対象ですけど、それは、気持ちが変わらへん。僕は、気が変わってほしい。仏壇の前に行ったら、心が手を合わすような気持ちに変えたいんです。お寺や神社って、気持ち変える装置でしょ。今のものづくり、仏壇づくりにそれが無い。同じものがいっぱいできるものづくりでは生まれへん。お仏壇は、手を合わせる先の大事な方を思い出す、気持ちを変える場所やと思います。感謝する場所っていかなあ。

仏壇のサラが出えへんようになってからでも、小さめの厨子(ずし)は出よったんです。ということ、ちゃんと求める人のところに届けたら、需要あるなど。最初は「ちっさいのでいいんや」と言うお客さんがあって、その写真を見た人が「これええやん」って。で、



二作目の写真を見て「これええやん」って。ネットでも売れましたし、うちのファイル見て「これでええわ」言う人がいて。あの内容とその値えで一致するんやなど。ある人なんて、お納めした後に請求書を見て「こんなんでええの？もつとするんや思ってたあ」って。一人でもそんなこと言わはるいうことは、可能性として、あるなあと。

本職の、本気を

漆塗りの逸品のひとつが、厨子なんです。芸術性とフリースタイル具合が高い。今、厨子の名前を「清凜」にしてるけど、ブランド名にしたらいんちやうかなあ。厨子は、ちよつと大仰に言えば「清凜」シリーズの第一弾。古典の形で、世間のモダンとは一線を画すけど、これのすつきりシリーズもつくりたい。六角形とか、平面でつくるのを。祭り屋台や仏壇以外の漆ものづくりも進めたい。今の生活に合わせた軸があって、遊び心があって。漆塗りの逸品が今回はたまたま厨子で、このシリーズで、ほんまの木地でつくった屋台とかをね。これ趣味のもんですよ、というような考え方の、たとえば箱とかを本職のやつがつくるんです。とんでもないレベルですよ、ミニなのに。ガチ本職の、本気っす。

想像を超える厨子にしたいと思った時に、それができる職人っていう選び方をしました。想いをちゃんとくんでくれて、形にしてくれる、リスペクトしてる職人を。職人への伝え方というか発注の仕方は、普通と逆。僕が発注受ける側やから思うんですけど、「こうしてくれ、あっちはこうして」って言うたら、そこ止まり。ここをこうせえ、ああせえは言わんとく。「こんな感じで、ええように、ええ思うようにつくって」って言うんすよ。ほなね、ええように思うもんとしておさめなあかんでしょ。ここはこう、あっちはこうって言われたら、そのとおりにしとつたら納めれるレベルになるでしょ。任すから、ええようにしとつてって言われたら、期待以上のことをするんすよね。そういう頼み方してる。注文言うと

したら、ここもうちよっとうとか、そのレベル。その次の段階では、こうしてくださって言うんです。さらに、今まで以上のもんをしてもらうために。

塗師はある意味、プロデューサー

塗師は、最終的には監修役。大工さんは白木までめんどうみて、彫刻は彫刻のことだけ。塗りは塗りのことだけ言いながら、シルエットにも噛んで、組み立てます。仏壇に限って言うたら、プロデューサーですよ。

塗りって京都とかでは分業で、下地は下地だけ、塗りは塗りだけ、蠟色（ろいろ）は蠟色だけなんすよ。仏壇屋はそれを統括する立場で、企画して発注して、彫り、金具、下地、塗り、蠟色、組み立てまで、うちは全部。スタイル持っていないとあかんし、提案できなアカン。言い方変えたら、提案できる幸せな立場です。

人を喜ばせるために

とにかく、お客さんを喜ばせたい。だれしも人を喜ばすために生まれてきて、僕にとつてなりわいとするところが、人に喜びを与えるところが漆塗りやっただけ。だから、うちの店の未来像って無いんすよ。喜ばせることをし続けるだけ。それによって導かれるひとつのカタチとしたら「何年待っても、砂川さんにしてほしい」ってこと、それって感動やと思うんすよ。仕事を受けた時に、感動ささなアカン。期待を裏切らんと想像を超えたっていうか。「こんなきれいな見たことない」って喜ばしたい。今しようことが、ちょっとずつですけどそういう風にいけよんで、まちがってないと思っとんすけど。

聞き手 二階堂 薫さん

兵庫・西宮生まれの神戸育ち、二〇一五年から姫路在住。コピーライターとして活動する他、兵庫県立大学非常勤講師、伝わる言葉の講座の講師を務めています。今回の聞き書きを通して、別世界の高級品だと思っていた漆が、ぐっと身近な存在に。職人魂や感性の研ぎ澄ませ方など共鳴する点も多く、漆にすっかり魅了され：漆ものに出会うたび、まじまじと見つめるようになりました。

写真：西松 史純